VITALITE　インタビュー

暴風神父が
やって来た！

メキシコ人神父　フライ・トルメンタ

聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿　代表取締役社長

フライ・トルメンタ（暴風神父）はリングネーム。
本名、セルヒオ・グティエレスSergio Gutierrez。49歳のメキシコ人神父。貧農家庭に17人兄弟の下から2番目として生まれ、幼時に家族とメキシコ市に移住。すさんだ都市生活と非行のなかから発心し、スペイン、ローマで哲学倫理を9年間学ぶ。1970年にカトリック・エスコラピオ会の神父として赴任後は、家出少年や捨て子などのために孤児院を開設し、プロレスラーとして運営資金を調達。得意の決め技はコンフェソーラ（懺悔）。

佐多：メキシコのプロレスは、日本のとは様式が違うようですね。

フライ・トルメンタ：メキシコ式プロレスはルチャ・リブレといって、街の広場や体育館で毎日のように試合が行われています。スリーメン・タッグマッチでは、まず対戦相手の頭上を跳び越えたり、股下をかいくぐったりの連続技で始まり、スピードとアクロバティックな足技が身上です。芸術的なひとつのショーといって良いと思います。

佐多：カトリックの神父であるあなたが、プロレスラーとはどういうことですか。

フライ・トルメンタ：レスラーのほとんどは副業ですが、神父というのは私一人です。孤児院の子供たちを養うにはどうすれば良いかを考え、ルチャ・リブレならば大金が稼げると思ったのです。私は決して強いレスラーではありませんが、メキシコの観客は私が闘うわけを理解し愛してくれました。対戦相手にリングの外に放り出されると、見ている子供と母親たちがロープの間から持ち上げてくれるほどです（笑）。

佐多：失礼ですが、ファイト・マネーは孤児院の維持のために充分ですか。

フライ・トルメンタ：今、145人の孤児を養うには一月に3000ドル位かかります。政府の援助と寄付で運営していますが、昨年暮、ペソが1ドル3000ペソから7000ペソに大暴落したため、ますます苦しい状況になっています。

今回は日本のプロモーターが呼んでくれ、昨日千葉で興行しました。私が育てた三人の孤児たちと一緒です。私はもう高齢ですし、日本のプロレスは危険なので、子供達に悪役をやってもらっています。四人のタッグ・マッチで、ファイト・マネーは400ドルでした。明日は神戸でチャリティーの試合をします。

佐多：うーん。それではちょっと安すぎて大変ですね。

ところでメキシコは世界一強大なアメリカという国の隣に位置していますが、貧困から抜け出して発展することができないでいますね。

フライ・トルメンタ：それはメキシコが発展しないというよりアメリカが押さえ付けて、発展させてくれない、と言ったほうが適切だと思います。

佐多：NAFTA（North America Fair Trade Agreement）を例にとりましても、私はメキシコにとって本当に良い条件とは思えないのですが、その後、一部の金持ちはペソをドルに換金して持ち出してしまい、メキシコの貧しい人々はますます苦況に追い込まれてしまう、全くひどい状況です。

フライ・トルメンタ：メキシコは太陽と水、肥沃な土地に恵まれ、石油もありますし、本来、豊かな国なのです。ですから、もしアメリカが抑圧することをやめてくれれば、良い状態になっていくと思います。

神は人間を自由なものとしてつくりました。私たちは神の奴隷ではありません。しかし私たちは人間の奴隷

フライ・トルメンタと、
“いたずらっ子たちの家” の孤児たち

なのです。

チェ・ゲバラは「イエス・キリストが我々を愛したように、我々がお互いに愛するようになれば、我々を支配できるような権力はなくなるだろう」と言っています。

佐多：チェ・ゲバラはアメリカの帝国主義に対して闘った勇敢な人物でしたね。

アメリカの巨大企業は、例えばケチャップを大量生産するために中南米に広大な土地を買い占め、見渡す限り一面のトマト・プランテーションにしました。またコーンフレークスを作るために、とうもろこしのモノカルチャー（単式農法）を押し進めました。もともとその土地に暮らし、自分たちの生活に必要な作物の全てを本当に限られた肥沃な土地で作っていた人たちは、住むところも畑も失って、都市に流れ、スラムを形成せざるを得ない。また国としても、モノカルチャーゆえに必須の食物は輸入に頼らざるを得なくなっていったわけです。そのような悲しい歴史は、我々も知っています。

フライ・トルメンタ：そのとおりです。それに頭脳流出ということがあります。たまにとても頭の良い人がいるとアメリカに連れていかれて、名前と国籍を変えるのです。ホアン・エルナンデスが、ジョン・アンダーソンと呼ばれているように。

アメリカはもともと移民の国です。それなのに中西部の大規模農場などで働くメキシコ人を差別し、不法就労者として締め出そうとしています。

しかし、やっぱりメキシコ人にも責任があります。それはメキシコ人が抑圧される状態を受け入れてしまったからです。私はミサの時には必ずチェ・ゲバラに言及し、強いものの言いなりになることをやめ、国のために働いて下さいと言っています。メキシコ人はいつか必ず立ち上がるときを見いださなければなりません。

佐多：そういう意味でも、子供たちへの教育は大事ですね。

フライ・トルメンタ：ええ。私は子供たちにちゃんとした教育を与えています。一年後に弁護士になる子も二人いて、政府機関で働かせようと考えています。

佐多：子供たちはどのように生活していますか。

フライ・トルメンタ：孤児たちは始めは私の教会に寝泊まりしていたのですが、サン・ファン・テオティワカンというところに小学校の廃屋を買い、孤児院にしました。そこには食事の世話をする女の人と、2歳以下の子供の面倒をみてくれる女の人が一人ずついます。18歳以上の大きい子が、一人あたり五人の子供の世話をし、協力しあって洗濯したり風呂に入ったり、また学校に行きます。

私もいつまでプロレスができるか分からないので、孤児たちが職業を身につけられるような施設をつくりたいと思っています。大工とか技術者、画家になって工芸品などを売り、生活費を工面できるようになるといいのですが。

佐多：孤児院を出て行く人はいますか。

フライ・トルメンタ：年に三、四人は出て行きます。それにひきかえ、入りたい人はいつも大勢いるのです。でももう入る余地がありません。私が日本に来ている間に、多分もう一部屋、寝室が増えていることでしょう。

佐多：神父は実に子供たちに慕（した）われておられるのですね。

フライ・トルメンタ：私は、孤児たちの中に自分の姿を見ています。私が少年の頃はケンカに明け暮れ、酒や麻薬に溺れました。しかし、このままじゃ駄目だと懺悔しようとした時、話を聞いてくれる人はいませんでした。

神父としてベラクルスに赴任して間もなく、孤児たちが教会に集まりだしました。25人ほどが寝泊まりするようになった時、教区司祭の突然の命令で、私はバスで8、9時間も離れた場所に飛ばされました。ところが、約半年後、子供たちが私を捜し出してやって来たのです。そこにいるとは教えてなかったのに……。

私はその時、子供たちを守るのが私の努めだ、と思わずにはいられませんでした。

＊フライ・トルメンタと孤児院への連絡は：「ストリート・チルドレンを考える会」
TEL：03-3200-7795（JULA出版局内）へ